

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00081

研究課題名（和文）現代の看取りにおける「死の民俗」の国際比較研究

研究課題名（英文）Comparative study of folklore regarding death and dying in hospice care today

研究代表者

諸岡 了介（Morooka, Ryosuke）

島根大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：90466516

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究プログラムでは、まず「死の民俗」の扱われ方の背景に関わる研究として、イギリスでのフィールドワークおよび文献調査を基礎にして、イギリスで成立した近代ホスピスの宗教的背景およびその現状について明らかにした。また、現代日本における「死の民俗」の歴史と実態に関しては、国際発表等を行って国内外での理解と議論を深めた。

次に、「死の民俗」のなかでも「死者臨在感覚」に焦点を当てて、これまで多様な領域に散在していた「死の民俗」への言及を包括的に整理し、考察を行った。またそこから、現代における看取りの場面に世俗主義的動向が顕著に見られることを明らかにし、次の研究の方向性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ホスピス・緩和ケア、精神医学、宗教学、社会学、民俗学といった多様な領域にまたがっており、そのため主題的に扱われることの少なかった「死の民俗」の実態と研究史について包括的に整理と分析を行い、今後のさらなる研究へと繋げている点に意義を有している。その際、イギリスを中心とした欧米の動向と日本の状況とをともに視野に収めて、国際比較の観点を深めている点も重要である。また、本研究プログラムの成果には、臨終期視像に関するガイドブックの翻訳をはじめ、ケア臨床に対する貢献を意図した仕事も含まれている。

研究成果の概要（英文）：The one of the results of this research program is to show the religious background of modern hospice established in England, with field and literature research in the UK. As another achievement, I made several presentations regarding “folklore of death and dying” existing in contemporary Japan, the topic almost unknown before outside Japan, to deepen discussion in terms of international comparison.

Furthermore, I have published a comprehensive research paper on the history of references to the phenomena “presence of the dead” in various fields such as hospice care, psychiatry, psychic research, or religious thoughts. In this research, I also point to a secularist tendency in contemporary societies, to explore further as a next research topic.

研究分野：宗教社会学、死生学

キーワード：死の民俗 ホスピスケア 死生観 世俗化

1. 研究開始当初の背景

本研究の主題は、ホスピスケアの現場にて報告される、お迎え 体験、中治り 現象、および死者臨在感覚といった「死の民俗」である。当研究代表者は、2007年・2011年・2015年と大規模な遺族調査に参画するなど、現代日本のホスピスにおける「死の民俗」の実証的研究を進めてきた。本研究では、そうした現代日本における実態の探究をさらに進めるとともに、それをホスピスケアの先進地であるイギリスをはじめとした、西欧諸社会との国際比較の観点から分析し考察していくことを狙った。

2. 研究の目的

本研究の主題は、ホスピスケアの現場などで報告される、お迎え 体験、中治り 現象、死者臨在感覚 (sensing the presence of the dead) といった「死の民俗」である。本研究では、申請者がこれまで携わってきた「死の民俗」の実証的研究を基礎に、現代日本における実態の探究をさらに進めるとともに、それを西欧との国際比較の観点から分析し考察していくことを目的とした。なお、2019年度より開始した本研究プログラムについて、新型コロナ・パンデミックの影響により、とくに後半では文献研究により重点を置くかたちに研究計画の調整を行うとともに、一年間の研究期間延長を行った。

3. 研究の方法

国際比較研究として、まず、イギリスにおけるホスピス・緩和ケアの現状や歴史について調査を実施し、複数のホスピスを訪問するとともに、当地でしか閲覧できない資料も含めて文献調査を行った。その際、とくに重視したのは、現代世界において死の民俗が語られる社会的背景を明らかにすることである。また、当研究代表者がこれまで携わってきた日本における調査研究を基礎に、イギリスにおいて学会発表やワークショップを実施するとともに、現地の研究者や関係者と国際的な視点からの議論を深めた。

死の民俗に関する学説史研究としては、とくには、終末期体験の一種として、死者の存在を感じるという「死者臨在感覚」に注目し、医学・心理学・宗教学・民俗学・超心理学など、各分野に散らばって存在する先行研究の探索を進めるとともに、その扱われ方について分析を進め、近年グリーフケアの新しい標準となった「継続する絆」論との関わりについて理解を深めた。

さらには、現代日本・現代世界において死の民俗が語られる社会的背景については、日本で言えば東日本大震災や新型コロナ感染拡大といった社会的イベントとも結びついたグリーフケアの展開や、さらにその基層にあり、現代世界になお支配的な世俗主義的な社会秩序に関する考察を深めた。

4. 研究成果

「死の民俗」とその扱われ方に関する国際比較の観点について、まず、イギリスで成立した近代ホスピスの宗教的背景およびその現状について明らかにし、2本の論文として公表した(「近代ホスピス成立の宗教的背景」および「現代イギリスにおける宗教的多様性とホスピス」)。前者では、ホスピスケアがその成立当時より、宗教的多元主義を前提としながら近代医学と結びついてきたことを、後者では、現代イギリスのホスピスケアにおける宗教的多様性への対処法が、イギリス独自の社会文化的基盤に結びついて確立してきており、今後ムスリムや移民による多様性の増大によって変容を迫られるという人口動態推計から推しはかれる将来についても論じた。

また、現代日本における「死の民俗」の歴史と実態に関しては、国際発表や国際シンポジウムのかたちで発表を行い、議論を深めた(“Terminal Lucidity and Remission in Japan,” “Deathbed Visions in Contemporary Japan,” “End-of-life Experiences in the Social and Historical Context of Japan”)。これらの研究を通して、一方では日本の文化的・宗教的な特徴が明らかになるとともに、他方では医療的アプローチの台頭や、そこに見られる世俗主義的傾向といった、国際的に顕著な動向が重要な課題であることが示された。

次に、「死の民俗」に関する実証的研究と研究史的研究およびその社会的・歴史的背景に関する考察の総合として、とりわけ「死者臨在感覚」に焦点を当てて、論文「死者に接して絆に繋ぐ：死者臨在感覚の研究史」を公表した。この論文はこれまで多様な領域に散在していたこの現象への言及を包括的に整理した研究であり、今後本現象に対する分野横断的な研究の基礎を与えるものであると言える。また、本論文でも言及した現代における看取りの場面に顕著な世俗主義的動向については、今後さらに深めるべき研究主題として学会発表を行った。

さらに、社会還元活動のひとつとして、看取りの場における「死の民俗」に関する実践の手引きである「看取りケアをする人のための終末期体験ガイド」(スー・ブレイン、ピーター・フェンウィック著)の日本語翻訳を行い、所属大学のリポジトリ上にて公表している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 諸岡了介	4. 巻 28
2. 論文標題 ヤン・プランパー 『感情史の始まり』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『宗教と社会』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諸岡了介	4. 巻 2020
2. 論文標題 近代ホスピス成立の歴史的・宗教的背景	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代宗教2020	6. 最初と最後の頁 111-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 諸岡了介	4. 巻 96
2. 論文標題 死者に接して絆に繋ぐ：死者臨在感覚の研究史	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 195-217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20716/rsjars.96.2_195	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 諸岡了介
2. 発表標題 世俗化論争史上のC・テイラー
3. 学会等名 印度学宗教学会第62回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 諸岡了介
2. 発表標題 チャールズ・テイラーにおける社会学的世俗化論批判
3. 学会等名 第94回日本社会学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 諸岡了介
2. 発表標題 近代ホスピス成立の宗教的背景 創設神話の再検討
3. 学会等名 印度学宗教学会第61回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryosuke Morooka
2. 発表標題 Terminal Lucidity and Remission in Japan
3. 学会等名 14th International Conference on the Social Context of Death, Dying and Disposal (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryosuke Morooka
2. 発表標題 Deathbed Visions in Contemporary Japan
3. 学会等名 Durham Seminar: Dying and death in contemporary Japan (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryosuke Morooka
2. 発表標題 End-of-life Experiences in the Social and Historical Context of Japan
3. 学会等名 CDAS Seminar: New Research on Death and Dying Trends in Asia (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 諸岡了介
2. 発表標題 死者臨在感覚の研究史
3. 学会等名 印度学宗教学会第63回学術大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 諸岡了介	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 13
3. 書名 「現代イギリスにおける宗教的多様性とホスピス」『ヨーロッパの世俗と宗教』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>翻訳「看取りケアをする人のための終末期体験ガイド」 https://ir.lib.shimane-u.ac.jp/ja/48688</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------